

基礎生産と漁獲量との関係

—漁業による基礎生産の利用—

(瀬戸内海におけるモデル計算)

(総述)

多々良 薫

Relation Between the Primary Production and the Commercial Fishery Production in the Fishing Ground Utilization of the Primary Production by the Boat Fishery (Review)

Kaoru TATARA

This paper aims to present a numerical model of the relation between the primary production and the fishery production in the fishing ground. The basic principle leading to the model is the scheme of energetic flows through the trophic levels in the biological production system in the sea area.

Firstly, the commercial catch was divided into two production series (fish- and benthos-feeding). Each series was then divided according to the trophic levels and species. On the other hand, a species-feeding habits matrix was prepared for each commercial species using the results of various studies of stomach contents, etc. These two informations were combined by the coefficient of assimilation between the trophic levels of each fish- and benthos-feeding production series. Through these procedures, the estimate of the total amount of energy consumed by the catch was calculated in terms of weight of primary production.

The model is shown in Figure 2, and the primary production consumed is estimated by the following equations :

$$(PC) = \sum_{i=0}^1 (PF_i) + \sum_{i=0}^1 (PB_i)$$

$$(PF_i) = (CF_i) / \sum_{n=0}^{\pi} G_n$$

$$(PB_i) = (CB_i) / \sum_{n=0}^{\pi} G_n$$

where

PC = Total amount of primary production utilized through the total catch

PF_i = Amount of primary production utilized through the catch of i-trophic level of fish-feeding series

PB_i = Amount of primary production utilized through the catch of i-trophic level of benthos-feeding series

CF_i = Amount of commercial catch of i-trophic level of fish-feeding series

CB_i = Amount of commercial catch of i-trophic level of benthos-feeding series
 G_n = Coefficient of assimilation from (n-1)-trophic level to n-trophic level
 r = Rate of dependence to the prey of fish-feeding series

The amount of the primary production which was utilized through the commercial catch was estimated from the amount of the fishery productions in the Seto Inland Sea under the following assumptions. Firstly, the relation among the transfer coefficient (t_n), the assimilation coefficient (G_n) and the coefficient of prey utilization (S_n) between n- and (n-1)-trophic levels is supposed to be $t_n = S_n \cdot G_n$, and also $G_n \cdot t_n$. However, no reliable value on S_n was obtained. In the present calculation, the assimilation coefficients are conjectured to be 0.3 from trophic level 0 (phyto plankton or detritus) to trophic level 1 (phyto pl. feeder or detritus feeder) and to be 0.1 for the higher levels. Secondly, r , the rate of dependence of benthos-feeding series to the prey of fish-feeding series, is conjectured to be 0.5.

Commercial fishery production in the Seto Inland Sea in 1958 was about 240×10^3 m.t., and the estimation of primary production utilized through the catch was about 19×10^6 m.t. In 1977, those values were about 406×10^3 m.t. in the catch and 29×10^6 m.t. in primary production. Commercial catch has increased by 1.7 times during past 20 years, and the utilization of estimated primary production increased about 1.5 times. Finally the paper derived an estimate that 60-80 m.t. of primary production of fishing ground is being consumed in each 1 m.t. of commercial catch.

There are some problems that should be clarified in the present method. The following points in question are also included in the summarizing discussions: qualitative contents of catch statistics, feeding habit of commercial species, transfer coefficient and assimilation coefficient between the trophic levels, reduction of assimilation coefficient by detour transformation, primary production consumed by benthos feeders, migratory features of fish resources and aquaculture productions.

海洋生物がその再生産力によって、尽きることのない人類の食糧資源としての可能性を秘めていることは、最も重要な特質である。この再生産サイクルの起点は植物プランクトンによる基礎生産である。基礎生産物は生物界の物質循環機構を介して、次々に高栄養段階の生物に再生産される。その一部が漁獲物として取りあげられ人類に利用される。基礎生産量に比例して漁獲量が得られるわけではないが、基礎生産量から求められる枠を越えた漁獲が得られないことは確かである。

ここでは、基礎生産と漁獲量との関係を検討し、基礎生産量が漁獲量につながる機構の解析を試みる。すなわちまず漁獲量からそれを支えた基礎生産量を求める方法を提示し、この方法を用いて瀬戸内海についてのモデル計算を行ない、漁業を通して利用した基礎生産量について検討を行なう。

科学技術庁は、過去約2年間資源調査所に海洋資源部会海洋生産力小委員会を設け、日本200海里水域の海洋生物生産力に関する取り扱いを行なった。著者は小委員会メンバーの一人として、漁業による海域基礎生産力の利用に関する検討に参加した。この総述はそこで著者が担当した取り扱いの内容を主な部分として準備したものである。

同小委員会における検討では、海洋資源部会長天野慶之博士、海洋生産力小委員会委員長木部崎修博士はじめ、専門委員各位から貴重な助言と検討をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。特に遠洋水産研究所所長崎福三博士には取り扱い全般について示唆に富む指導と助言をいただきました。更に東北大学教授西沢敏博士からは低次生産とその Energy flow に関する最近の知見について懇切なご指導をいただきました。また安楽・遠藤・弘田他の委員からはプランクトン生産に関して、青山・浅見・須田・林他の委員からは高次生産に関して討論をいただきました。さらにモデル計算にあたっては南西海区水産研究所石岡清英技

官がプログラミングを受け持ってご援助して下さいました。南西海区水産研究所長桑谷正幸博士はこの報告を研究所報告として印刷する機会を与えられました。これらの方々に厚くお礼申し上げます。

1. 漁獲物と基礎生産の利用

瀬戸内海周辺では1960年代以後のいわゆる高度成長時代に沿岸地域の工業化・都市化が急激に進んだ。そのため産業排水や生活排水が海域に流入して、水質の富栄養化が進み、大規模な赤潮発生や種々の環境問題が起る事態にもなった。

漁業を取りまく諸条件も大きく変化したが、特に水域の富栄養化が餌生物を通して漁業資源の変化に強い影響を与えたことは明らかである。植物プランクトンによる生物生産は動物プランクトンを通して高次栄養段階の生物に利用される。漁獲物となる海域の生物はおおむねプランクトン食種、ペントス食種および魚食種や、エビ・カニ食種などの高次生物であり、しかも商業漁獲物として価値のあるものに限定される。したがって、海域の基礎生産量がそのまま漁業生産に反映されるとは限らない。つまり漁業資源の特性や漁業の特徴によって、海域における基礎生産の利用は如何ようにも変わると見てよいであろう。

ここでは、海域の基礎生産量に対応して、漁業が如何にそれを利用しているかについて検討する。そのため漁獲物を食性によって生物生産系と栄養段階に区分し、転送効率を考慮した上で、漁業生産物が漁獲物となるまでに消費したと考えられる基礎生産量を求めた。

2. 漁業が利用した基礎生産量を推定するための基礎資料

1) 漁獲統計

まず漁獲物の種類別重量が必要であるが、日本周辺では魚種別漁獲量統計表に海区別統計が収録されている。瀬戸内海では鱗別漁獲統計表として公表される更に詳細な統計が利用できる。この統計表は、1964年以

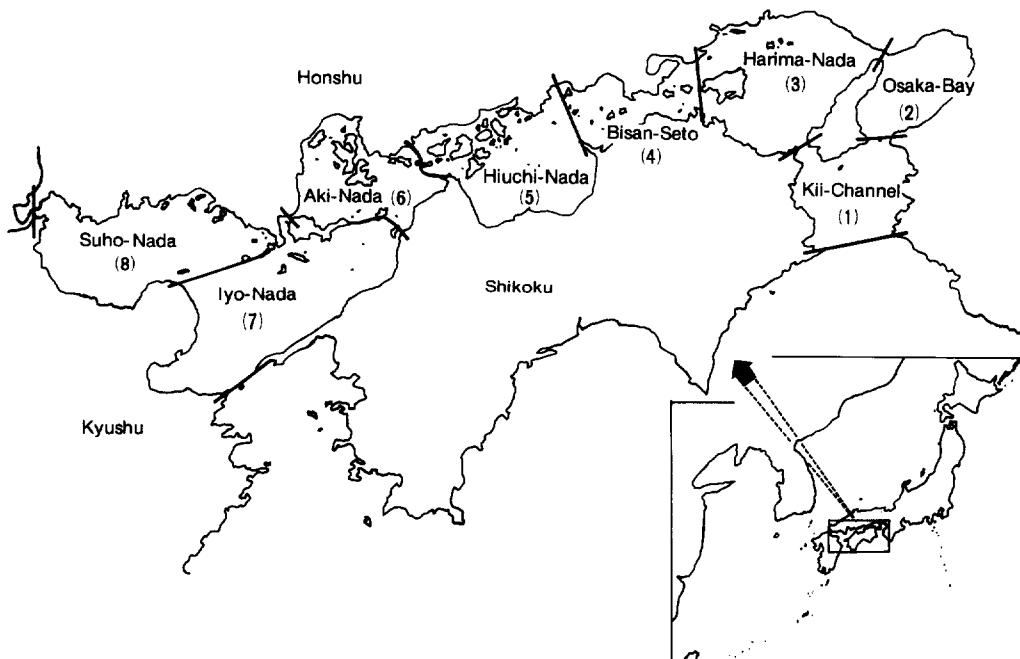


Fig. 1 Fishing ground of the Seto Inland Sea.

降、中四国農政局が公表しているものである。これより先、1958年と1963年については瀬戸内海漁業調整事務局（現同事務所）が漁業センサス資料を基に公表した灘別統計表を利用した。

この統計表には、瀬戸内海を8灘（紀伊水道・大阪湾・播磨灘・備讃瀬戸・燧灘・安芸灘・伊予灘・周防灘）に区分し（Fig. 1），その海面漁業および養殖業について，

- (i) 生産構造（経営体数、など）
- (ii) 生産量（努力量、漁業別漁獲量、種別漁獲量など）
- (iii) 生産額

などの統計を含んでいる。

なお、ここでは後述の理由から、養殖生産物に関する検討は行なわなかった。

2) 漁獲物の食性

漁獲物として揚げられたものから基礎生産量を求める場合、その漁獲物の生物界における物質循環の中での位置を知る必要がある。つまり食物の質量を推定しなければならない。

ここでは灘別漁獲統計に含まれる約47銘柄の種類について、生物生産系別に食性およびその段階表を用意する。その基礎となる食性については、瀬戸内海における詳細な食性調査結果、瀬戸内海における生態研究結果、他水域の研究結果などを引用又は参考としたほか、これらの結果から推定した。

3. 推 定 方 法

1) 漁獲物の食性マトリックス

植物プランクトンが生産したいわゆる基礎生産物がエネルギーとして高次栄養段階種へ流れる道すじは、瀬戸内海の場合も、魚食生物生産系とペントス食生物生産系に大きく区分できると考える（Fig. 2）。

魚食系は、主として植物プランクトン→動物プランクトン→プランクトン食種→魚食魚類等の系列であり、ペントス食系は主としてデトライタス→デトライタス食ペントス→ペントス食種→魚類等の系列である。しかし、2つに区分したこれらの系列の間にも捕食関係はあるから、エネルギーの流れが全く分かれている訳ではない。とくにペントス食系の場合は種々の段階で魚食系の栄養源にも直接依存している場合が多いことに注意しなければならない。

種類別漁獲量にあげられている種類について、Table 1 に示す食性マトリックスを準備した。

なお、海面漁業漁獲物中の海藻類については栄養段階を0とし、魚食系50%，ペントス系50%とした。また、食性・生態の上で、魚食系・ペントス食系の両系に亘ると見られる種類（タチウオおよびその他の魚※）についても、両系50：50とした。

2) 種類別漁獲量

1958年と1963～1977年の16年間について、灘別・種類別漁獲量を Table 2 (1977年の例) の様に整理した。統計的銘柄には、生物学的に複数種を含む場合がある。

3) 漁獲量の基礎生産量への転換

まず、これまで述べた食性マトリックスと、灘別・種別漁獲量を組み合わせて、灘別・生物生産系別・栄養段階別漁獲重量表を作る。この栄養段階別漁獲重量に転送効率の逆数を乗算して、漁獲されるまでに捕食したと考えられる鮮生物推定重量を、植物プランクトン換算重量として求める。つまり、漁獲物を通して漁業が利用した基礎生産量を推定することとなる。

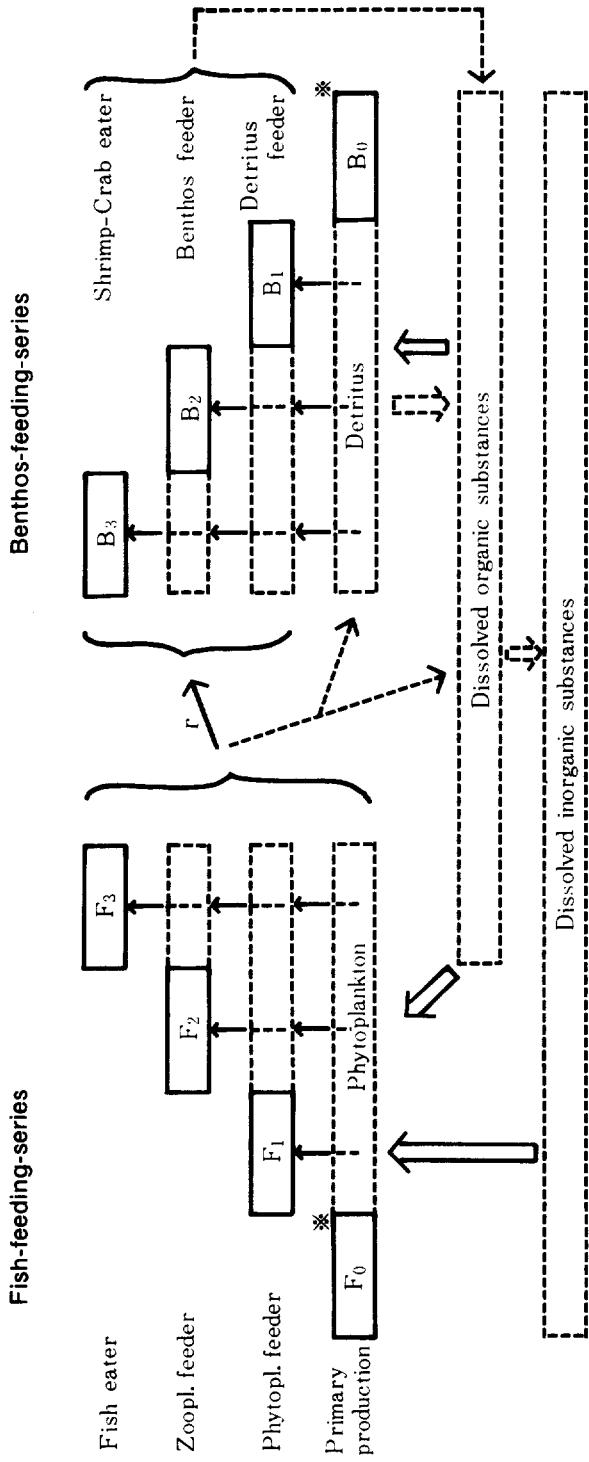
ここで推定式は次のように表わされよう。

$$(PC) = \sum_{i=0}^3 (PF_i) + \sum_{i=0}^3 (PB_i)$$

PC : 全漁獲物を通して利用した基礎生産量

PF_i : 魚食系種 i 段階漁獲物を通して利用した基礎生産量

Fig. 2 Utilization of primary production in the fishing ground by the commercial fishery (scheme).



where : PC : Total amount of primary production utilized through the total catch.

\mathbf{PF}_1 : Amount of primary production utilized through the catch of i-trophic level of fish-feeding series.

\mathbf{PB}_1 : Amount of primary production utilized through the catch of benthos-feeding series.

\mathbf{CF}_1 : Amount of commercial catch of i-trophic level of fish-feeding series.

\mathbf{CB}_1 : Amount of commercial catch of i-trophic level of benthos-feeding series.

G_n : Coefficient of assimilation from (n-1) -trophic level to n-trophic level.

r : Rate of dependence to the prey of fish-feeding series.

Table 1. Species-feeding habit matrix.

Species	Bio-production series				Fish-feeding (F)				Benthos-feeding (B)				Total (%)
	Trophic level		0 (Plant)	1 Phyto pl. feeder	2 Zoo pl. feeder	3 Fish eater		0 (Plant)	1 Phyto pl. feeder	2 Zoo pl. feeder	3 Fish eater		
	Species												
1 マ イ ワ シ Sardine			50	50									100
2 カ タ ク チ Anchovy					100								100
3 シ ラ ス Shirasu (Anchovy larvae)					100								100
4 ア ジ 順 Horse mackerels					100								100
5 サ バ 順 Mackerels					100								100
6 ブ リ Yellow tail						100							100
7 ヒ ラ メ Bastard halibut						100							100
8 メ イ タ Fine spotted flounder									100				100
9 他のカレイ・ヒラメ Other flat fishes									50	50			100
10 サ メ 順 Sharks										100			100
11 ニ ベ・グチ 順 Croakers										100			100
12 エ ソ 順 Lizard fishes						100							100
13 ハ モ Eel (<i>Muraenesox cinereus</i>)										100			100
14 タ チ ウ オ Ribbon fish							50				50		100
15 イ ボ ダ イ Butter fish					100								100
16 エ イ 順 Skates										100			100
17 マ ダ イ Red Sea Bream										100			100
18 ク ロ ダ イ Black sea bream										100			100
19 サ ワ ラ Sawara (<i>Scomberomorus</i>)						100							100
20 ゴ ラ 順 Mullets										50	50		100
21 ス ズ キ Sea bass						100							100
22 イ カ ナ ゴ Sand lance					100								100
23 ア ナ ゴ Eel (<i>Astroconger</i>)										100			100
24 コ ノ シ ロ Gizzard shad				100									100
25 カ サ ゴ・メ パ ル Rock fishes (<i>Sebastes</i>)										100			100
26 他 の 魚 Other fishes						15	35			15	35		100
27 コ ウ イ カ Sepia (Cuttle fish)										100			100
28 他 の イ カ Other Squids										100			100
29 タ コ 順 Octopuses										100			100
30 ク ル マ エ ピ Kuruma prawn										100			100
31 他 の エ ピ Other shrimps									100				100
32 ガ ザ ミ Blue crab										100			100
33 他 の カ ニ Other crabs										100			100
34 ウ ニ Sea urchin								100					100
35 ナ マ ゴ Sea cucumbers								100					100
36 シ タ ゴ Mantis shrimps									100				100
37 エ ム シ 順 Polychaetas									100				100
38 他 の 水 動 Other benthos									50	50			100
39 ア ワ ピ Abalone									100				100
40 サ ザ エ Turbo									100				100
41 ハ マ グ リ Clam									100				100
42 ア サ リ Short necked clam									100				100
43 モ ガ イ Ark shells									100				100
44 タ イ ラ ギ Pen shells									100				100
45 他 の 貝 Other shell fishes									100				100
46 ワ カ メ Wakame sea weed		50					50						100
47 他 の 草 順 Other sea weeds		50					50						100

Table 2. Catch amount by species and by fishing ground (Boat fishery 1977) M.T.

Species	Fishing ground No.		Kii 1	Osaka 2	Harima 3	Bisan 4	Hiuchi 5	Aki 6	Iyo 7	Suho 8	Total
1 マ イ ワ シ Sardine			2,888	19,930	331	—	—	—	152	—	23,301
2 カ タ ク チ Anchovy			6,262	17,916	22,385	213	42,879	8,251	8,964	134	107,004
3 シ ラ ス Shirasu (Anchovy larvae)			5,696	3,337	1,329	—	—	181	986	—	11,529
4 ア ジ 順 Horse mackerels			1,939	405	1,880	6	230	145	297	29	4,931
5 サ バ 順 Mackerels			1,827	1,175	237	1	10	44	89	—	3,383
6 ブ リ Yellow tail			193	21	115	10	33	13	54	1	440
7 ヒ ラ メ Bastard halibut			38	6	19	43	158	10	85	14	373
8 メ イ タ Fine spotted flounder			116	162	601	442	594	305	423	248	2,891
9 他のカレイ・ヒラメ Other flat fishes			378	796	2,029	1,221	1,460	534	1,366	2,436	10,220
10 サ メ 順 Sharks			27	54	4	—	105	7	60	2	259
11 ニ ベ・グチ 順 Croakers			149	497	272	3,665	810	281	357	310	6,341
12 ニ ソ 順 Lizard fishes			1,892	165	218	27	1,461	226	800	330	5,119
13 ハ モ Eel (<i>Muraenesox cinereus</i>)			296	41	18	—	17	9	36	1	418
14 タ チ ウ オ Ribon fish			4,231	68	154	—	458	408	774	18	6,111
15 イ ボ ダ イ Butter fish			3	1	—	—	—	—	—	—	4
16 エ イ 順 Skates			19	29	14	7	108	23	79	87	366
17 マ ダ イ Red sea bream			240	93	74	23	1,418	502	594	16	2,960
18 ク ロ ダ イ Black sea bream			90	30	365	486	785	260	183	573	2,772
19 サ ワ ラ Sawara (<i>Scomberomorus</i>)			281	132	529	177	1,024	137	474	259	3,013
20 ポ ラ 順 Mullets			124	348	810	286	691	288	939	1,488	4,974
21 ス ズ カ Sea bass			128	703	751	306	430	117	283	676	3,399
22 イ カ ナ ゴ Sand lance			1,636	3,646	15,022	3,412	728	4	—	—	24,448
23 ア ナ ゴ Eel (<i>Astroconger</i>)			238	1,024	1,204	580	1,116	492	365	814	5,833
24 コ ノ シ ロ Gizzard shad			269	517	2,377	319	524	392	399	552	5,349
25 カ サ ゴ・メ パ ル Rock fishes (<i>Sebastes</i>)			138	178	616	410	747	219	323	353	2,984
26 他 の 魚 Other fishes			6,700	2,332	4,431	3,051	5,105	2,383	8,349	5,719	38,070
27 コ ウ イ カ Sepia (Cuttle fish)			4,320	227	1,101	571	4,536	480	3,448	797	15,480
28 他 の イ カ Other squids			239	177	994	101	541	45	2,115	289	4,501
29 タ コ 順 Octopuses			431	528	1,892	621	837	641	795	1,157	6,902
30 ク ル マ エ ビ Kuruma prawn			142	112	171	35	52	24	189	257	982
31 他 の エ ピ Other shrimps			1,573	1,376	2,495	1,129	3,519	1,487	4,920	4,028	20,527
32 ガ ザ ミ Blue crab			153	61	163	48	426	48	2	6	907
33 他 の カ = Other crabs			118	38	183	548	193	32	89	340	1,541
34 ウ ニ Sea urchin			46	—	1	8	252	34	413	24	778
35 ナ マ ロ Sea cucumbers			117	43	617	97	476	1,661	1,044	840	4,895
36 シ タ ロ Mantis shrimps			126	669	1,980	582	1,523	160	88	816	5,944
37 エ ム シ 順 Polychetas			—	3	22	7	29	17	—	35	113
38 他 の 水 動 Other benthos			4,260	—	14	11	—	—	—	32	4,317
39 タ ワ ピ Abalone			114	29	10	—	4	19	115	3	294
40 サ ザ エ Turbo			150	4	87	28	373	56	282	213	1,193
41 ハ マ グ リ Clam			13	—	32	—	—	—	—	83	128
42 ア サ リ Short necked clam			17	1	352	103	1,798	1,003	637	22,846	26,757
43 モ ガ イ Ark shells			7	25	—	1,301	—	—	—	192	1,525
44 タ イ ラ ギ Pen shells			—	—	111	1,297	—	—	162	485	2,055
45 他 の 貝 Other shell fishes			195	62	792	2,174	5,892	3,040	2,224	9,946	24,325
46 ワ カ メ Wakame sea weed			145	28	150	467	200	24	93	52	1,159
47 他 の 草 順 Other sea weeds			1,026	98	2,313	2	325	290	602	191	4,847
SUB-T			48,990	57,092	69,265	23,815	81,867	24,292	43,649	56,692	405,662

Table 3. Conversion of the commercial catch weight to the estimated consumption of primary production by bio-production series, by fishing ground and by year (1958, 1963-1977). Unit: m. t.

Fishing ground (For 1977)	Fish-feeding series						Benthos-feeding series				PF+PB
	F ₀ (Plant)	F ₁ Phyto pl. feeder	F ₂ Zoo pl. feeder	F ₃ Fish eater (Sub-T)	PF	B ₀ (Plant)	B ₁ Detritus feeder	B ₂ Benthos feeder	B ₃ Shrimp-crab eater		
1 Kii	1	6	660	2,331	2,998	0	5	87	1,887	1,978	4,956
2 Osaka	0	35	1,227	627	1,889	0	0	42	857	899	2,788
3 Harima	1	8	1,389	1,087	2,486	1	3	90	1,986	2,079	4,565
4 Bisan	0	1	136	544	681	0	8	56	1,492	1,556	2,237
5 Hiuchi	0	2	1,487	1,707	3,196	0	15	102	2,685	2,803	5,969
6 Aki	0	1	299	514	815	0	10	43	773	826	1,641
7 Iyo	0	2	389	1,668	2,059	0	8	131	2,183	2,322	4,381
8 Suho	0	2	34	1,097	1,133	0	58	124	1,575	1,757	2,880
Total	3	57	5,622	9,575	15,257	2	107	674	13,438	14,220	29,477

PB_i : ベントス食系種 i 段階漁獲物を通して利用した基礎生産量

$$(\text{PF}_i) = (\text{CF}_i) \times \prod_{n=0}^{i-1} g_n$$

$$(\text{PB}_i) = r \cdot (\text{CB}_i) \times \prod_{n=0}^{i-1} g_n$$

CF_i : 魚食系種 i 段階の漁獲量

CB_i : ベントス食系種 i 段階の漁獲量

g_n : ($n - 1$) 栄養段階から n 段階への餌生物同化率

r : ベントス食系種漁獲物の魚食系餌生物種への依存度

4. 得られた結果

上に述べた推定式による計算にあたって、栄養段階別漁獲重量 (CF_i , CB_i) は、求められている。しかし餌生物同化率 g_n は転送効率 t_n と次式の関係で結ばれていると考えられる。

$$t_n = S_n \cdot g_n$$

S_n : n 段階種の ($n - 1$) 段階種餌生物利用率

この式は同化率 g_n が転送率 t_n より可成り大きくなるであろうことを意味しているが、利用率 S_n の値は今のところ信頼すべき推定値をうることができない。唯、 S_1 (植物プランクトンから動物プランクトンに至る利用率) がほぼ 1.0 に近いことが知られているのみである。ここでは $g_1=0.3$ とし g_2 , g_3 を一率に 0.1 として計算を行なった。実際の g_2 , g_3 は 0.1 より可成り大きいとすれば、以下の計算結果は基礎生産利用度をその分だけ過大に見積ったことになるであろう。しかし後述するように、食物鎖における側鎖の存在を考慮すればこの過大評価は帖消しとなる可能が強いと考えられる。

またベントス食系種のエネルギー源は魚食系餌生物の直接捕食と、生物系からの排泄物やその屍体が源となるデトライアスである。しかし、その依存する比率は不明である。ここでは魚食系餌生物への依存度 (r) を便宜的に 50% として計算する。

これらの便宜的な数値を導入すれば、漁獲物を通して利用した基礎生産量は次式で推定できることとなる。

$$\begin{aligned} (\text{PC}) &= \sum (\text{PF}_i) + \sum (\text{PB}_i) \\ &= (\text{CF}_0) + \sum_{i=1}^3 \left\{ (\text{CF}_i) \times \frac{1}{3} \times 10^4 \right\} \\ &\quad + (\text{CB}_0) + \frac{1}{2} \left[\sum_{i=1}^3 \left\{ (\text{CB}_i) \times \frac{1}{3} \times 10^4 \right\} \right] \end{aligned}$$

瀬戸内海における年次別・灘別・生物生産系別漁獲量から、上記の方法で求めた基礎生産量を、Table 3 に示した (1977年の例)。

5. 論

1) 計算上の問題

(1) 統計と食性について： 種別統計にあげられた47種のうち17種柄は2種以上の種を含んでいる。食性マトリックスはこの種柄別に食性を評価しているから、複数種の種柄については食性が実態を反映できない。しかし「サメ類」や「グチ類」のように、その大部分は食性が類似している場合が多く、“その他の

カレイ・ヒラメ”にしても、魚食性のヒラメとペントス食のメイタは別銘柄となっているから、他のカレイ類が一括されても、ここでの分析には問題はないであろう。ただ「その他の魚」のような銘柄では、全漁獲の8～9%を占める銘柄だけに、厳密には今後検討しなければならない問題が残されている。

さらに食性については、詳しい研究結果を引用できた種もあるが、断片的な調査結果しか利用できなかつた場合がある。また、充実した調査結果があっても食性は餌生物環境に大きく左右され、時期と場所によって変化するから、その評価がむづかしい場合もある。ただ、変動が大きいと云っても、それぞれの種類の生態・形態からみて、参考とした食性研究結果から大きく逸脱するとは考え難い。例えば、マダイがイカナゴやカタクチなどの魚食系プランクトン食種などを捕食することがあっても、位置づけとしてはエビ・カニ食と区分することに問題はないであろう。しかし、食性は幼魚から成魚までの発育によって変わるものがある。内海資源は一般に幼魚や若年魚の多い資源であるから、その点でも食性の評価に問題を残しており、今後の課題である。

(2) 転送効率について：ここで行なった計算における大きい問題点は、食段階間の転送効率の推定値が海域における実態を正しく反映しているかどうかである。瀬戸内海においてその実態を調べた研究は無いが、他の海域についても知見は貧弱のようである。ここでは便宜的に植物プランクトンから動物プランクトンでは $\frac{3}{10}$ 、他の場合はすべて $\frac{1}{10}$ を使った。この推定法による場合、実験的にしろこの効率についての知見を高めることは最も重要な課題の一つであろう。

また転送効率については漁業資源の特色から来る問題がある。瀬戸内海は全体として幼魚の生育場としての性格が強く、漁獲物が高次栄養段階の種でも一般に若令である。しかし漁獲統計にはこのような情報は“シラス”を除いて全く含まれていない。若令期の食性が成魚と質的に異なること併せて、若令期の転送効率が成魚にくらべて可なり高いことに注意しなければならない。これも今後の検討課題である。

これら瀬戸内海における漁業と資源の特色を考慮すると、ここで得られている計算結果、つまり漁獲物を通して利用した基礎生産量は過大に評価されている可能性がある。

(3)迂回転送による同化効率の低下：図2に示した模式図では、同一栄養段階内での捕食関係を想定していない。つまり、或段階の食種は必ず一段低次の餌生物を捕食するとの仮定である。しかし、同一栄養段階内でも、より大型種が小型種を捕食する場合が有り得よう。捕食の一般的傾向としては、大型の餌ほどまた高次の餌生物ほど同化効率が良いと考えられ、捕食種の餌の大きさの選択 (Size preference) でも捕食可能な範囲内では比較的大型餌生物の側に選択が高い。

同化率を0.1とした場合、餌生物10の全量を直下の栄養段階から得たとすれば、同化量は1となる。しかし、 $\frac{1}{10}$ を同一段階から、つまり迂回して側鎖から同化したとすれば、同化量はほぼ0.7、 $\frac{3}{10}$ を側鎖から同化すればほぼ0.4となり、同化効率は迂回するほど低下する。つまり側鎖による同化量の増大とともに利用した基礎生産の推定値は過少評価となる。

このようなエネルギーの迂回転送は、相対的な高次捕食種の減少とともに大きくなる筈であり、側鎖を断ち切ることによって全体としての基礎生産利用効率は高まるであろう。

海域におけるエネルギー転送メカニズムでは、種々の栄養段階におけるこのような迂回転送が Energy flow のバッファーとして働いていると考えられ、この解明も重要課題の一つである。

(4) ペントス食系種が利用(消費)した基礎生産量の推定：ここで用いた計算法では生物生産系を魚食系とペントス食系とに2大別する考え方をとっている。しかし胃内容物調査結果を見ても、種によつては、特に高次栄養段階の種類では、その食性が確然とどちらかの系に位置付けてきかない場合がある。例えば魚食系のヒラメがエビ類を捕食する場合や、ペントス食系のマダイの胃内容物にイカナゴが出現する場合である。ただ、ブリ・サワラ等の典型的魚食系種がエビ・カニ等に依存する度合は、マダイなどエビ・カニ食種における魚食系餌生物への依存にくらべると、問題にならないほど小さいことは明らかである。

これらの事情を考慮して、便宜的に魚食系種のペントス食系餌生物への依存は0%とし、逆にペントス食

系種の魚食系餌生物への依存は50%であると仮定した。この仮定は今後の研究によって修正を要する点である。

(5) 養殖生産物について：瀬戸内海における海面養殖業の生産は近年25~30万トンに及んでいる。海面漁業生産量が約40万トンであるから日本の他の沿岸に比べて養殖業は遙かに重要な部分を占めている。ただ、ハマチ・タイ・クルマエビと云った投餌養殖の場合は、主として他水域で漁獲された餌を使用するから、内海の基礎生産を利用するとは云い難い。またこれらの種の生産は全養殖生産量の10~15%に過ぎない。

カキ、のり、わかめの養殖生産物は、養殖生産量の80%以上を占め、いずれも内海の基礎生産を利用する。しかし、これらの養殖产品による基礎（植物）生産の利用は、貝類（カラ付重量約17万トン）によるものと海藻類（生産量約15万トン）であるから、ベントス食系種によるものが重要部分である。

カキやその他の貝類の主要餌生物は、デトライタスと植物プランクトンとされるから、投餌をしない養殖产品による基礎生産の利用は、高々数十万トンの水準と推定される。従って、現状の推定値の確からしさからみて、海面漁業による推定利用量数千万トンの誤差範囲と云うことになろう。

2) 計算結果について

瀬戸内海における1年間の漁業生産は海面漁業が約40万トン、養殖業が約27万トン（1977年）であり、約39ton/km²/年と云う高い生産性を示している。この値は日本の200海里水域における約2.0ton/km²/年や他の沿岸漁業水域の生産が大まかに約10ton/km²/年と推定されるのに比べて、内海漁業の生産性が如何にすぐれているかを物語っている。これは戦前の約12万トンの生産から戦後期と高度成長期における2回の飛躍的生産増の結果である。特に内海沿岸地帯の工業化・都市化が進んだ1963年～1970年の時代には海面漁業において漁獲重量が約1.7倍にも増加した（Fig. 3）。

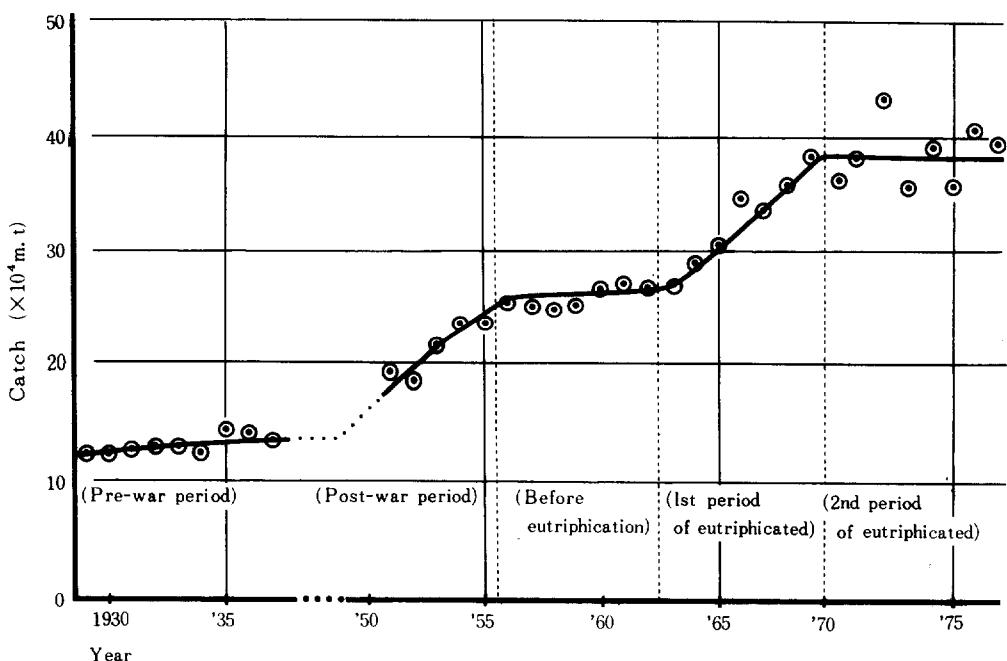


Fig. 3 Change of catch amount by boat fishery in the Seto Inland Sea.

Table 4. The amount of commercial catch and the estimated consumption of primary production through the commercial catch. Right side numerals of each fishing ground row are the ratios of each value to the average values of 1958 and 1963 in %.

(1) Catch (m.t.)

Year	Fishing ground	Kii 1	Osaka 2	Harima 3	Bisan 4
1958		32,391	108	44,879	89
1963		27,859	92	55,420	111
1964		22,071	73	55,043	110
1965		28,126	93	58,049	116
1966		31,361	104	56,119	112
1967		35,868	119	60,858	121
1968		36,815	122	50,311	100
1969		40,162	133	63,526	127
1970		39,330	131	52,338	104
1971		40,695	135	55,856	111
1972		45,094	150	45,892	92
1973		41,505	138	49,482	99
1974		48,435	161	62,547	125
1975		55,771	185	55,188	110
1976		51,662	171	72,866	145
1977		48,990	163	57,092	114
				69,265	150
					23,815
					120

(2) Estimated amount of primary production utilized (10^3 m.t.)

Year	Fishing ground	Kii 1	Osaka 2	Harima 3	Bisan 4
1958		2,933	108	3,464	112
1963		2,514	92	2,720	88
1964		1,829	67	2,441	79
1965		2,399	88	2,439	79
1966		3,288	121	2,880	93
1967		3,489	128	2,800	91
1968		3,964	146	2,542	82
1969		4,892	180	3,357	109
1970		4,798	176	2,768	90
1971		4,564	168	2,669	86
1972		5,785	212	2,448	79
1973		4,846	178	2,650	86
1974		5,620	206	3,635	118
1975		6,159	226	2,605	84
1976		5,951	218	3,815	123
1977		4,976	183	2,788	90
				4,565	141
					2,237
					141

Hiuchi 5	Aki 6	Iyo 7	Suho 8	Total
37,909	96	18,530	104	243,622 97
41,182	104	17,235	96	260,919 103
47,693	121	19,685	110	289,431 115
38,471	97	23,628	132	301,087 119
51,355	130	26,091	146	317,286 126
46,540	118	27,892	156	334,711 133
51,285	130	25,213	141	348,644 138
64,095	162	23,538	132	380,848 151
56,939	144	22,592	126	373,993 148
53,654	136	21,002	117	379,249 150
78,919	200	23,382	131	436,093 173
59,838	151	21,986	123	365,539 145
65,200	165	23,481	131	403,410 160
69,415	176	21,532	120	375,027 149
81,915	207	25,743	144	420,824 167
81,867	207	24,292	136	405,662 161

Hiuchi 5	Aki 6	Iyo 7	Suho 8	Total
3,417	106	1,511	103	19,503 102
3,022	94	1,415	97	18,840 98
3,315	103	1,436	98	19,434 101
3,044	95	1,322	90	19,231 100
3,313	103	1,467	100	21,233 111
3,161	98	1,553	106	21,770 114
3,326	103	1,456	100	22,268 116
3,252	101	1,392	95	23,840 124
3,747	116	1,397	95	24,129 126
4,049	126	1,309	89	24,108 126
5,104	159	1,306	89	26,593 139
4,375	136	1,407	96	23,691 124
4,946	154	1,552	106	27,731 145
5,367	167	1,563	107	28,144 147
5,809	180	1,836	125	31,892 166
5,999	186	1,641	112	29,477 154

Table 5. The amount of commercial catch and the estimated consumption of primary production through the catch by bio-production series. Right side numerals of each fishing ground row are the ratios of each value to the average values of 1958 and 1963 in %.

(1) Fish-feeding series

(a) Catch amount (m.t.)

Year	Fishing ground	Kii 1	Osaka 2	Harima 3	Bisan 4
1958		21,267	111	29,406	83
1963		17,077	89	41,701	117
1964		14,737	77	28,543	80
1965		19,328	101	41,504	117
1966		19,199	100	42,955	121
1967		24,564	128	42,477	119
1968		23,261	121	38,530	108
1969		20,755	108	52,806	149
1970		22,498	117	43,122	121
1971		24,736	129	45,346	128
1972		26,685	139	33,772	95
1973		26,084	136	42,120	118
1974		29,851	156	50,707	143
1975		35,752	186	47,679	134
1976		30,568	159	62,312	175
1977		29,103	152	49,222	138
				48,717	170
					6,274
					134

(b) Estimated consumption of primary production through commercial catch (10^3 m.t.)

Year	Fishing ground	Kii 1	Osaka 2	Harima 3	Bisan 4
1958		1,776	110	2,255	107
1963		1,460	90	1,956	93
1964		1,150	71	1,517	72
1965		1,484	92	1,838	87
1966		1,891	117	2,009	95
1967		2,160	133	1,989	94
1968		2,334	144	1,779	84
1969		2,499	154	2,403	114
1970		2,866	177	1,950	93
1971		2,817	174	1,927	92
1972		3,699	229	1,543	73
1973		3,218	199	1,895	90
1974		3,692	228	2,618	124
1975		4,025	249	1,859	88
1976		3,716	230	2,598	123
1977		2,998	185	1,889	90
				2,486	140
					681
					118

Hiuchi 5	Aki 6	Iyo 7	Suho 8	Total
18,229	116	9,881	116	125,514 100
13,220	84	7,174	84	125,220 100
15,599	99	5,673	67	120,595 96
14,076	90	6,031	71	149,174 119
25,907	165	6,018	71	153,016 122
20,837	133	5,663	66	165,041 132
28,198	179	6,063	71	187,213 149
25,046	159	5,547	65	187,386 149
24,502	156	5,786	68	195,142 156
26,057	166	5,403	63	193,081 154
52,660	335	5,587	66	198,315 158
36,534	232	6,311	74	178,291 142
33,423	213	7,641	90	200,852 160
40,859	260	8,265	97	198,055 158
48,064	306	11,336	133	240,227 192
50,521	321	11,073	130	217,387 173

Hiuchi 5	Aki 6	Iyo 7	Suho 8	Total
1,719	109	740	111	10,256 103
1,443	91	590	89	9,638 97
1,436	91	537	81	9,440 95
1,426	90	575	86	10,499 106
1,696	107	606	91	11,348 114
1,517	96	625	94	11,733 118
1,758	111	614	92	12,608 127
1,721	109	624	94	13,031 131
2,003	127	598	90	13,823 139
2,029	128	543	82	13,431 135
2,817	178	522	78	14,264 143
2,340	148	580	87	12,854 129
2,386	151	653	98	15,064 151
2,661	168	680	102	14,464 145
3,128	198	872	131	16,670 168
3,196	202	815	123	15,257 153

(2) Benthos-feeding series

(a) Catch amount (m.t.)

Year	Fishing ground	Kii 1	Osaka 2	Harima 3	Bisan 4
1958		11,125	102	15,473	106
1963		10,783	98	13,720	94
1964		7,334	67	26,500	182
1965		8,798	80	16,545	113
1966		12,162	111	13,164	90
1967		11,305	103	18,381	126
1968		13,555	124	11,781	81
1969		19,408	177	10,721	73
1970		16,832	154	9,217	63
1971		15,960	146	10,511	72
1972		18,409	168	12,120	83
1973		15,421	141	7,363	50
1974		18,584	170	11,841	81
1975		20,020	183	7,509	51
1976		21,095	193	10,554	72
1977		19,887	182	7,870	54
				20,548	118
					17,541
					116

(b) Estimated consumption of primary production through the commercial catch (10³m.t.)

Year	Fishing ground	Kii 1	Osaka 2	Harima 3	Bisan 4
1958		1,157	105	1,209	122
1963		1,054	95	764	77
1964		679	61	924	94
1965		915	83	601	61
1966		1,397	126	871	88
1967		1,329	120	811	82
1968		1,630	147	763	77
1969		2,393	216	954	97
1970		1,932	175	818	83
1971		1,747	158	742	75
1972		2,086	189	905	92
1973		1,628	147	755	76
1974		1,928	174	1,017	103
1975		2,134	193	746	76
1976		2,235	202	1,217	123
1977		1,978	179	899	91
				2,079	143
					1,556
					153

Hiuchi 5	Aki 6	Iyo 7	Suho 8	Total
19,681	83	8,649	92	24,093
27,962	117	10,062	108	26,710
32,094	135	14,013	150	29,419
24,396	102	17,598	188	31,281
25,448	107	20,073	215	38,804
25,704	108	22,230	238	33,648
23,087	97	19,151	205	42,692
39,050	164	17,991	192	52,497
32,438	136	16,806	180	47,292
27,597	116	15,599	167	59,925
26,260	110	17,796	190	101,757
23,304	98	15,676	168	69,440
31,777	133	15,840	169	58,377
28,557	120	13,268	142	23,361
33,851	142	14,407	154	26,800
31,346	132	13,220	141	26,157
				51,707
				204
				188,276
				148

Hiuchi 5	Aki 6	Iyo 7	Suho 8	Total
1,698	104	771	97	789
1,579	96	825	103	1,055
1,879	115	899	113	1,301
1,618	99	747	94	1,060
1,617	99	861	108	1,236
1,644	100	928	116	1,002
1,568	96	842	106	1,005
1,531	93	768	96	921
1,744	106	799	100	971
2,020	123	766	96	1,027
2,287	140	784	98	1,220
2,035	124	827	104	1,122
2,560	156	899	113	1,302
2,706	165	883	111	1,912
2,681	164	964	121	2,709
2,803	171	826	104	2,322
				252
				1,757
				135
				14,220
				154

漁獲量が急増した背景には、漁船・漁具などの機械化・近代化による漁獲力の急激な増加があり、資源に対する漁業の圧力が強化され漁獲物は全体として小型化・若令化が進んでいる。

この漁獲の量的拡大と共に漁獲物中の高級種が減り、多獲性種や中級種の割合が多くなっている。また漁場環境も産業排水や生活排水の流入によって富栄養化が進み、内海全域で基礎生産の増加があったと考えられる。

このような漁業の推移を背景にしながら計算結果を考察しよう。

(1) 漁業ならびに利用した基礎生産の推移： まず Table 4 には年次別・灘別に漁獲量と、先に述べた計算式で求めた「漁業が利用した基礎生産」を示した。漁獲が約24万トンから約40万トンに増大した期間に、漁獲物として利用した基礎生産量は1958年における約2,000万トンから1977年における約3,000万トンに増加した。1977年における基礎生産の利用は魚食系漁獲物を通して約1,500万トン、ペントス食系漁獲物を通して約1,400万トンである。Table 5 には生物生産系別に漁獲と漁獲による生物生産の利用状況を表したが、最近の約20年間に海域における生物生産の利用は約50%増加したと推定される。この増加割合は魚食系・ペントス食系両系のいずれの場合もほぼ同率である。

この約20年間に漁獲量は約1.7倍に、基礎生産の利用は約1.5倍に増加した。ここで漁獲物として揚げられた水産物が消費したと考えられる基礎生産量は、漁獲量の増加と共に増大している。しかしその増加は単純な比例関係とはならない。Fig. 4 には漁獲物1トン当たりの基礎生産の利用（消費）の変化を経年に図示した。生物生産系を込みにした値では1970年までは減少し、以後増加に転じている。ただし、最近の3年間（1975～1977年）の高い値は、西部海域におけるイカ類の大発生に影響されている可能性がある。特定種の著増は、かつて異常発生と云われて、充分利用されない場合が多かった。貝類をはじめこの様な大発生が可成りの頻度で見られるようになったのは近年の内海の特色である。また同時に充分ではないにしてもその利用度が高まったのも近年の特色である。

生物生産系別（Fig. 5）に見ると、込みにした状況が主としてペントス食系の変化に強く影響されていることが分かる。ペントス食系の1964年～1973年の値が低いのは貝類が多獲された事に影響されているが、以後の上昇は特徴的である。魚食系では1960年代後半に低下したあと1970年代前半には一旦上昇しているが、その後はペントス食系とは逆にまた低下している。一般に漁獲物の平均栄養段階が低下すれば、漁獲量当りの基礎生産の利用度は低下し、栄養段階の高い漁獲物の割合が多くなればその利用度は高まる事になるであろう。

1964年～1970年は瀬戸内海における漁獲量が急増した時期と一致し、それ以後の数年は増加傾向が停滞して約40万トンに頭打ちとなった時代である。つまり急激な漁獲増は平均栄養段階を低下させることによって達成され、その後の量的増加が停滞した時期には再び栄養段階の高次のものへと漁獲が戻って行ったことを示している。ただここで、漁獲量急増時にはカタクチイワシ・イカナゴや、多獲性貝類のような栄養段階の低い漁獲物の増加が著しかった割には、基礎生産の利用率の低下は著しくないように思われる。高次種の漁獲増も同時に進行したと見るべきであろう。また1970年以後の漁業資源の平均年令が、それ以前の平均年令と変わっている証拠はないから、Fig. 4 の右上がりは、漁獲物の種類組成の変化によるものと見て良いであろう。

(2) 栄養段階別にみた漁獲と基礎生産の利用： 瀬戸内海における1977年の漁獲を生産系別・栄養段階別に区分して Table 6 に示した。この表には漁獲を通して利用した基礎生産についても同様の区分で表示している。まず漁獲量についてみると魚食系の53.6%に対してペントス系は46.4%であった。魚食系の内訳をみると動物プランクトン食種 (F_2) が約78%を占め、魚食種 (F_3) の13%，植物プランクトン食種 (F_1) の8%となっている。これに対しペントス食系ではエビ・カニ食種 (B_3) が43%，デトライタス食種 (B_1) 34%，ペントス食種 (B_2) が22%で比較的バランスのある漁獲がなされている。

この漁獲を通して利用した基礎生産量の計算値では、いずれの生産系でも高次栄養段階の値が高いが、特

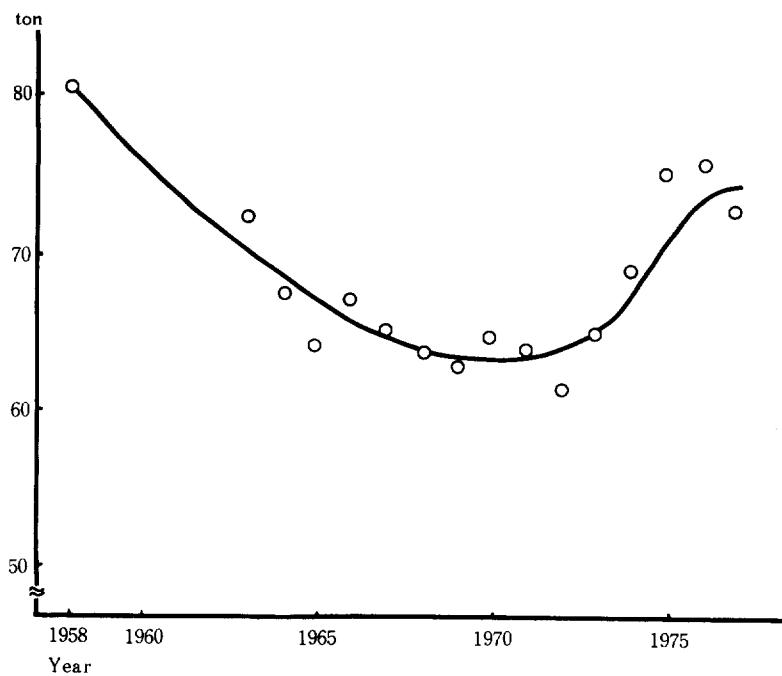


Fig. 4 Changes of estimated consumption of primary production by 1 m. t. of commercial catch (total).

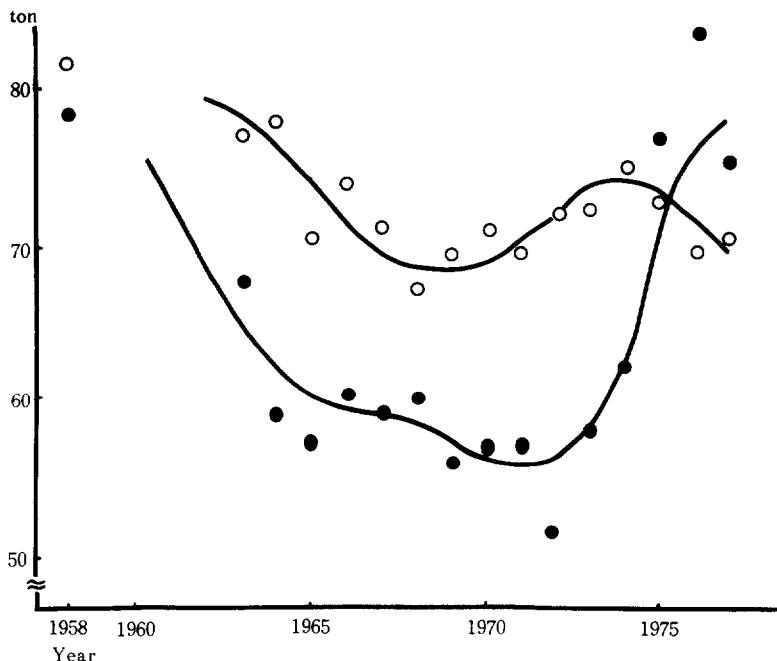


Fig. 5 Changes of estimated consumption of primary production by 1 m. t. of commercial catch.
 ○ : by fish-feeding series, ● : by benthos-feeding series,

Table 6. Catch amounts and estimated consumptions of primary production through the catches by bio-production series and by trophic level (for 1977).

F : Fish-feeding series B : Benthos-feeding series C : Catch amount

P_c : Estimated consumption of primary production through the catch

Trophic level	F				B				T			
	C ton	%	1000ton	P _c	C ton	%	1000ton	P _c	C ton	%	1000ton	P _c
0	3,003	1.4	3	0.0	3,003	1.6	2	0.0	6,006	1.5	5	0.0
1	17,000	7.8	57	0.4	64,222	34.1	107	0.8	81,222	20.0	164	0.6
2	168,660	77.6	5,622	36.9	40,425	21.5	674	4.7	209,091	51.4	6,296	21.4
3	28,724	13.2	9,575	62.8	80,626	42.8	13,438	94.5	109,350	27.0	23,013	78.1
Total	217,387	100.0	15,257	100.1	188,276	100.0	14,220	100.0	405,662	99.9	29,477	100.1
T.C (%)	53.6				46.4				100.0			
T.P _c (%)	51.8				48.2				100.0			

にベントス食系ではエビ・カニ食種（B₃）の値が約95%を占めている。

この結果から見れば、漁業による生産の約1/2は中位の栄養段階（F₂, B₂）であり、低位（F₁, B₁）と高位（F₃, B₃）が夫々約1/4を占めていることが分る。しかし、この漁獲を通して利用している基礎生産では約45%は高位栄養段階種（F₃, B₃）を通して利用し、約15%が中位種（F₂, B₂）を通しての利用であることが分る。漁業による選択的な漁獲が、海域基礎生産の利用を強く特色づけることがうかがえる。また高級種と云われる種類は栄養段階の高いものが多いから、高級種を選択的に獲る沿岸漁業の海域利用は合理性があると云えよう。

Table 7 にはここで1977年について述べた数値の推移を1958年および1963年～1977年について百分率で示している。

(3) 資源の分布特性について： 水域の基礎生産と漁獲物による基礎生産の利用を対比する際のもう一つの問題は、漁業対象資源が移動する問題である。瀬戸内海漁業の対象資源には内外海交流種がある。幼期に内海で生育し、生長と共に生活領域を外海にまで拡げて内外海を交流する種である。従って、内海で捕食し生長して外海で漁獲される場合や、逆に冬期に外海で生活した後、夏期に内海で漁獲される場合もある。このような事情を考えると、厳密には内海で漁獲されたものがすべて瀬戸内海内部の基礎生産を利用消費したものとは云い難い。

しかし、内外海に分布が拡がる種と云っても極く少数の浮魚、例えば、マイワシやアジ・サバ類のように幼期だけに内海に棲む種が見られるだけで、殆んどの種は隣接の極く狭い外海沿岸域に季節的な行きつ戻りつをする程度である。そして、内海でのマイワシ、アジ・サバ類の漁獲はあまり大きくはない。また内外海交流生態は年々大きく変わるものではないから、内海と隣接外海の漁業が相対的に安定している現状からみて、基礎生産の利用状況を年々の推移で見る限り大きい問題とはならないだろう。

次に瀬戸内海の東部では魚食系の漁獲がベントス食系を上回り、西部では逆にベントス食系漁獲物が魚食系より多い特色が明らかである。漁獲物を通して利用（消費）した基礎生産でもこの傾向は同じである。この内海の東と西の資源の特性が、漁業による利用の結果であるか、又は逆に水域の生物生産の特性が漁業そして漁獲物を特性づけているか、は明らかではない。

しかし比較的漁場が平坦で底魚への漁獲圧力が強く、その資源状態の悪化が酷いと考えられる紀伊水道・大阪湾・播磨灘など東部では、ベントス食系を通しての基礎生産の利用が劣っており、底魚資源の悪化が比較的小ない西部水域ではベントス食系を通しての利用が東部に比べて優れているように見られる。

Table 7. Catch amounts and estimated consumption of primary productions through the catches by bio-production series and by trophic level, from 1958 to 1977 in the Seto Inland Sea.

C_F : Catch amount of fish-feeding series, F_0, F_1, F_2, F_3 : Trophic levels of fish series, P_{CF} : Estimated consumption of primary production through C_F , C_B : Catch amount of benthos-feeding series, B_0, B_1, B_2, B_3 : Trophic level of benthos-series, P_{CB} : Estimated consumption of primary production through C_B .

Year	C_F ton	F_0			F_1			F_2			F_3			P_{CF} 1000 ton	F_0	F_1	F_2	F_3	P_{CB} 1000 ton	B_0	B_1	B_2	B_3	$\%$	
		F_0	F_1	F_2	F_3	C_B	B_0	B_1	B_2	B_3	$\%$	$\%$	$\%$												
1958	125,514	0.9	0.9	81.8	16.3	118,109	1.0	21.3	34.4	43.3	10,256	0.0	0.0	33.4	66.6	9,247	0.0	0.5	7.3	92.2					
1963	125,220	0.8	1.6	82.8	14.8	135,700	0.7	37.0	24.4	37.9	9,638	0.0	0.1	35.9	64.1	9,202	0.0	0.9	6.0	93.1					
1964	120,595	2.0	2.3	80.3	15.4	168,836	1.5	42.7	23.1	32.8	9,440	0.0	0.1	34.2	65.7	9,994	0.0	1.2	6.5	92.3					
1965	149,174	2.1	2.3	82.8	12.8	151,913	2.0	42.0	24.3	31.6	10,499	0.0	0.1	39.2	60.7	8,732	0.0	1.2	7.1	91.7					
1966	153,016	1.6	2.8	81.6	14.1	164,271	1.5	38.6	26.8	33.0	11,348	0.0	0.1	36.7	63.2	9,885	0.0	1.1	7.4	91.5					
1967	165,041	2.4	3.0	81.4	13.1	169,670	2.3	42.5	22.3	32.8	11,733	0.0	0.1	38.2	61.7	10,037	0.0	1.2	6.3	92.5					
1968	187,213	1.9	3.0	83.2	11.8	161,431	2.2	43.9	20.5	33.4	12,608	0.0	0.2	41.2	58.7	9,660	0.0	1.2	5.7	93.1					
1969	187,386	1.9	3.4	82.0	12.6	193,462	1.9	49.4	17.4	31.3	13,031	0.0	0.2	39.3	60.5	10,809	0.0	1.5	5.2	93.3					
1970	195,142	1.8	3.7	81.4	13.1	178,852	2.0	47.0	18.8	32.2	13,823	0.0	0.2	38.3	61.5	10,306	0.0	1.4	5.4	93.2					
1971	193,081	1.6	4.1	81.6	12.7	186,168	1.7	47.1	19.2	32.0	13,431	0.0	0.2	39.1	60.7	10,677	0.0	1.4	5.6	93.1					
1972	198,315	1.7	4.4	80.4	13.5	237,779	1.5	53.5	16.1	29.0	14,264	0.0	0.2	37.3	62.5	12,329	0.0	1.7	5.2	93.1					
1973	178,291	2.9	2.0	81.7	13.4	187,249	2.8	46.0	18.9	32.4	12,854	0.0	0.1	37.8	62.1	10,837	0.0	1.3	5.4	93.2					
1974	200,852	3.4	2.7	79.4	14.5	202,558	3.3	41.3	20.3	35.1	15,064	0.0	0.1	35.3	64.6	12,667	0.0	1.1	5.4	93.5					
1975	198,055	1.9	8.3	75.6	14.3	176,972	2.1	32.6	21.4	43.9	14,464	0.0	0.4	34.5	65.1	13,680	0.0	0.7	4.6	94.7					
1976	240,227	1.5	5.0	80.9	12.7	180,598	2.0	28.9	20.9	48.2	16,670	0.0	0.2	38.9	60.9	15,222	0.0	0.6	4.1	95.3					
1977	217,387	1.4	7.8	77.6	13.2	188,276	1.6	34.1	21.5	42.8	15,257	0.0	0.4	36.9	62.8	14,220	0.0	0.8	4.7	94.5					

参考文献

- 浅見忠彦, 1962 : 太平洋南区のカタクチイワシに関する研究. 南水研報, (16).
- 中国・四国農政局, 1963~1977 : 濱戸内海漁業漁獲統計表.
- 遠藤拓郎, 1972 : 濱戸内海の基礎生産. 海洋科学, 4.
- 花岡 資, 1952 : 内湾生産力の標示について. 内水研報, (1).
- , 1953 : 内湾漁獲物の組成について. 日水誌, 19(4).
- , 1954 : Community としてみた水産資源に関する一考察. 内水研報, (6).
- , 1977 : 魚類群集の構造と生産, 海の生物群集の生産, 畑中正吉教授退官記念誌.
- 林 知夫ほか, 1960 : 魚食性底魚類の食性に関する研究. 農林水産技術会議成果 2.
- 池田郁夫, 1957 : 食性の問題. 東海黄海における底魚資源研究 4.
- 今林博道・花岡 資・高森茂樹, 1975 : 生物群集内における稚魚期および若魚期のマダイの摂餌生態 I. 他魚種との関係. 本誌, (8), 101~111.
- ・———・矢野 実, 1977 : 底性動物群集と関連した底魚群集の変動. 本誌, (10), 73~86.
- ・———・———, 1977 : 個体群の種内関係. 本誌, (10), 87~100.
- 岩井昌三・森脇伸二, 1981 : 明石海峡及びその周辺海域における重要水族の資源生態調査, 本四架橋漁業影響調査報, (29). 日水資保護協会.
- 科学技術庁, 1974 : 海洋微生物およびプランクトンの役割と開発利用に関する基礎資料. 資源調査所資料, (31).
- 北森良之介ほか, 1958 : 藻場の生態学的研究 I. 日水研報, (11).
- 北森良之介, 1959 : ————— II. 日水研報, (12).
- , 1964 : 濱戸内海とその近接水域における底曳網漁獲物の食性群別組成について. 内水研刊行物 C輯, (2~3).
- 桑谷幸正, 1962 : スズキを対象とする漁礁の総合的研究. 京都府水試報, 8.
- 工藤晋二・通山正弘ほか, 1969 : 土佐湾陸棚崖産の底魚の食性の研究. 本誌, (2).
- 岸田 達, 1979 : 周防灘西部沿岸におけるスズキ(セイゴ)の体長別・季節別食性について. 内海漁業研究会報.
- 近藤正人, 1978 : 濱戸内海における栄養塩類などの分布と季節変化. 海と空, 54 (2~3).
- 松原喜代松・落合 明・岩井 保, 1965 : 魚類学(上・下). 恒星社厚生閣版.
- 村上彰男ほか, 1976 : 濱戸内海の海域生態と漁場. フジテクノシステム.
- 森慶一郎, 1980 : 油谷湾における浮遊期・底生生活初期のマダイ生態. 西水研報, (54), 59~78.
- 西沢 敏, 1973 : 海洋低次生産力の動態. 海洋科学.
- , 1977 : 深海系への粒状有機物質輸送序説. 海洋科学 2.
- , 1977 : 海洋低次生産試論. 海の生物群集の生産, 畑中正吉教授退官記念誌.
- 西沢 敏ほか, 1980 : 日本近海における動物・植物プランクトンの現存量に関する調査. 科学科術庁資源調査所.
- 農林省, 1951~1978 : 農林省農林經濟局統計情報部. 漁業養殖生産統計年報.
- 農林水産技術会議, 1980 : 資源培養方式開発のための沿岸域における若令期タイ類補給機構に関する研究. 研究成果, (129).
- 日本水産資源保護協会, 1980 : 水生生物生態資料. 日水資保護協会.

- 大森道夫, 1979 : 仙台湾における底魚の生産構造に関する研究 IV. 西水研報, (52), 131~168.
- 阪本俊雄, 1978 : 紀伊水道におけるタチウオの食性. 内海漁業研究会報.
- , 1981 : マダイ, タチウオ等内外海交流種に対する架橋の影響調査. 本四架橋漁業影響調査報 29, 日水資保護協会.
- 瀬戸内海水産開発協議会, 1958・1963 : 瀬戸内海の水産統計資料, 瀬戸内海漁業調整事務局.
- 高尾亀次, 1964 : 瀬戸内海のカタクチイワシ *Engrauli japonica* (Houttuyn) の生態について, 内水研刊行物C輯, (2), 1~50.
- 多々良薰, 1981 : 内海・内湾漁業生物の生産力について—瀬戸内海漁業資源の生産力—. 本誌, (13), ~.
- 上田和夫, 1972 : 水圏の富栄養化と水産増殖業. 日本水産学会, 水産学シリーズ, (1), 108~119.
- 宇野史郎, 1980 : 日本近海における動物・植物プランクトンの現存量に関する調査(西沢敏・木部崎修ほか), V. 瀬戸内海の植物及び動物プランクトンの現存量と生産力, 科学技術庁資料.
- 山本護太郎, 1977 : 底生生物群集, 海の生物群集の生産, 畠中正吉教授退官記念誌.
- 横田滝雄, 1956 : 食糧からみた魚類の群集について.
- , 1960 : 魚種間の関係からみた魚類の生産. 日水学会シンポ資料.
- , 1961 : 漁業生物学における community study の意義. 水産科学 9 (1).
- 横田滝雄ほか, 1961 : 魚類の食性に関する研究. 南水研報 14, pp.234.